

📌 普段着のわたしたち 📌

あけましておめでとうございます。

本年も「友引町内会通信」を懲りずにご愛読いただけますようよろしくお願い申し上げます。

さて、実は今年度4月から「黄色のおばさん」と呼ばれるPTAパトロールを務めております。「0のつく日」は子供達の登校時間に合わせ、写真の装備を身にまとい、通学路、交差点、踏切に出発し、子供らを安全に学校へ導く黄色いおばさんです。

夏は大変でした。悠長に日傘をさしては子供らの安全を守るべく「横断旗」が振れません。しかし無防備で夏の日差しに立ち向かえるお年頃ではありませんから、女優か、いや農婦か？というようなツバ広めの帽子をかぶり、サングラスに手袋に、マスク。この黄色のエプロンがなければ、「怪しげなおばさん」と避けられるような出で立ち。8月の1ヶ月はやれやれ安堵でしたが、9月10日も日差しとの過酷な戦いでした。



そして、冬到来。寒い。夏より厳しいと体感しております。

街の朝、登校時間帯は空が狭い為か、まだほとんど日陰です。ダウンを着て、ブーツを履き帽子に手袋にマフラーとマスク。ダウンの上には黄色のエプロン。自分でも笑えるほど面妖な格好です。じっとしていると寒いので、旗を振るアクションは大きく伸びやかに。気を紛らわすために、子供らへの声かけも大きめに「おはよ〜」。夏よりもさらに「怪しげなおばさん」と化しております。

と言いつつ、まだまだ来年度も頑張りますよ。

訶梨帝母

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

皆様観ておられましたかな？ もちろん『鎌倉殿の13人』です。12月18日で最終回でした。過去10年単位でも最高の大河だと思います。

池端俊策作品の『麒麟がくる』も相当素晴らしかったのですが、『鎌倉殿の13人』はさすがの三谷脚本でしたね。

さて、今年からは『どうする家康』ということでまた戦国大河となります。コメディテイストが強めとのことですが、どうなる家康です。

でも楽しみです。

征阿



📌 普段着のわたしたち 📌

私の妻は、生まれ育った京都大原三千院の近くにあるお寺の住職をしています。只今、単身赴任中です。

妻は、法事などで読経の終盤に戒名をお称えた後、「同称十念」と発声して参拝者の方たちと一緒に御念仏を称えます。先日の法事である重大なことが発覚しました。

その男性の檀家さんは、もう何年も前に、妻の「同称十念」を聞き間違えて、「どうしよう十念」と思い込んで生活しておられたそうです。

男性は仕事でミスをしてピンチに追い込まれた時、手を合わせて「どうしよう十念、どうしよう十念…(汗)」と何度も拝んだそうです。

すると摩訶不思議！ベートベン『第九』の第4楽章のフレーズのように問題が爽やかに解決されていったそうです。これで何度も助けられたそうです。

それは、「知らぬが仏」と解釈したら良いのでしょうか？

私は20代の時、真面目な新興宗教を自分で開きたいと思っていた時期がありました。そのマニュアルを手に入れて勉強もしていました。

もう少し若ければ、「どうしよう十念教」の開祖になれたかも知れません。俊徳丸



先日詣でたお寺さまで、当たると評判のおみくじを引きました。



残月未還光 樽前非語傷 戸中人有厄 祈福保青陽。お分かりになりますでしょうか？ 私はチンプンカンブンでありました。

残月未だ光を還さず、樽前にして語傷に非ず、戸中の人厄有り。福を祈りて青陽を保つ。お分かりになりますでしょうか？ 私はこれでもチンプンカンブンです。

有明の月が皓々と照って明るく、酒の席で口論をしたわけでもないのに、家の中で災厄が起こる。神仏に福を祈れば運が保たれるだろう。大体このような意味らしいです。要は、神仏に祈れば運が向いてくるよ、

と。で、酒の席でのうかつな行動には注意しよう。ですかね。一応、吉とありますが、良いのか悪いのか・・・。

でも、とりあえず最前線にいるお坊さんでよかったと思っています。 やっさん

喜び祝う めでいたし



明けましておめでとうございます。
 本年もよろしくお願い申し上げます。

新年を祝う言葉であり、正月の大切な挨拶の一つである。この「おめでとう」という言葉の語源は、「愛(づる)」「と」「甚(し)」「が」が変容したものだといわれている。

愛(づる)とは、見掛けだけの可愛らしさや美しさから大事にするのではなく、本質的な素晴らしさを味わい、愛(づる)の心で大切にすることをいい、また甚(し)とは、甚(し)しいという言葉と同じ意味で、程度を遥かに超えた状態のことをいう。

この二つが合わさって、「愛で甚し」から「おめでとう」という言葉になったとされるのが通説である。

そしてまた、「明ける」という言葉には、「世」と「夜」が掛かっている。

昔の日本人は、一年を一つの「世」と考えていた。新年を迎えると、この世の最後の夜が明けたとことから「明けましておめでとう」と言祝(ことほ)ぐのである。

ところで、この「おめでとう」という言葉、仏教ではあまり使われない。なぜかといえば、仏教ではこの世を苦しみの世界と説くからであり、「生」は「苦」の始まりだからである。

こう書くと、この世にはおめでたいことが何一つ無いのか、と聞こえてきそうではある。

その代わり、ではないのだが、仏教では「喜ぶ」という言葉を手を替え品を替えて多用し、めでたさを表現している。踊るとい言葉もそれを表すし、特に浄土においては合掌から礼拝、すべての所作が喜びの表現となる。

苦しみの世界だと説いておいて、この世の何を喜ぶのだとなりそうなものであるが、

日々の出会い、すべての出来事が与えてくれる良き因縁を我が事として捉え、喜ぶのだ。

その人との出会いを喜び、その出来事との巡り合いを喜び、その縁に感謝するために「祝う」のではなく、盛大な「喜び」で表現する。出会ってくれて、ありがとう。巡ってきてくれて、ありがとう。と。仏事の大半は、それで成り立っている。

旧年中、無事に過ごすことの出来た毎日の積み重ねが、新年の挨拶をするお互いにあるからこそ「明けましておめでとう」という言葉が交わされる。私たちはお陰の全てを把握することは出来ないが、それをいただいているからこそ、今という時を当たり前に過ごせていることは忘れてはならない。この当たり前前という気持ちだが、この世の喜びを遮断する。

明けましてありがとうございます。おめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

めでたし。めでたし。

12月は、阿弥陀様前の松の立花をクリスマスツリーのようにイルミネーションなどで飾り付けをします。それは、ちょっとやりすぎい〜？
今月はそんなお話です…



お寺で Xmas をしてみた

『年を送り、年を迎えるこの時に、多くの人の胸に浮かぶであろう、あの気持ち。去り行く年に対しての心残り、来る年に対してのささやかな期待。年々を重ねていく凋落の想いと、いま、巡り来る新しい年にこもる回生の希い。「行きかう年もまた旅人」の感慨を、今日の旅の上で私はしみじみ感じた。…』(東山魁夷画伯・画文集より)

↓地蔵堂もご覧の通り！



うちのお寺は梵鐘がなく、除夜の鐘の行事がありません。私が住職になった時、それに代わる年末の行事が出来たらと思い、東山魁夷画伯が書いておられるような年末を静かに過ごしてもらえよう行事を考えました。

こうして20年程かけて進化した行事が **お寺 de クリスマス** です。

毎年クリスマスの前後日曜日に行っています。

うちのお寺のホームページを見た他宗派の住職



さんから、「何をふざけたことをやっておるのだ！」と叱られたこともあります。

実は、我が町は織田信長の影響で、江戸時代中期まで潜伏(隠れ)キリシタンが多く存在した町なのです。現在も牢屋跡や処刑場跡が存在します。うちのお寺にも、その時没収されたマリア観音さまを御三方お祀りしています。マリア観音さまの法要なのです。

当日は、堂内で『♪アヴェマリア』や『♪アメイジンググレイス』を弾き語りしてもらいながら、マリア観音さまの長く美しい髪をお一人お一人に優しく撫でていただき、日常起こった怒りの心を静め、許す心に変化させ新しい年をおだやかに迎えます。毎年進化し続けそんな行事になりました。

これを、ホームページを管理して下さっているNさんが、先ほど苦言を言っておられた住職さんのお寺に出向き、説明して納得していただきました。

俊徳丸



こもりうた96

新年号にあたり、今後の予定を予め申し上げます。この『こもりうた』は100号まで書かせていただき、翌月からしれっと消滅。その時に応じた題名で書こうと思います。

そもそも『こもりうた①』は2015年2月。尼僧寺院の住職の血迷った結婚、それに続く高齢出産、老骨に鞭打つての子育て奮闘記のようなモノを書いたら意外と面白いのでは、とそそのかさされ（いえ、もっと柔らかく善意なお言葉で原稿の依頼をしてくださいました）、調子に乗ってしばらく書いたはいいが、見も知らぬ他人の子の成長など他人様にはさほど面白くないことに、早い段階で気づきました。加えて、そこそこ育つと新たな発見もなく、ましてやご披露するような話題はそうそうないのです。

キリのよいところで『こもりうた』を取り下げようと思いつつ、キリってどこ？と思っているうちに間もなく100。これを逃さずキリといたします。この機に過去95号をざっと確認したところ、愛しの愚息に触れた回はわずか18。薄情な母というなかれ、そんなもんです。8年前に『こもりうた』なんてつけてしまった事を、ここにお詫びいたします。「子育て日記風」の体で始めたものの、ほぼ、小説、歴史書、映画、楽器、お酒という、ただただ私の趣味の話題だったことに、苦笑いです。

中島みゆきさんの2001年発表の曲で『心守歌』（こころもりうた）というあまり

知られていない曲があります。

「子守り」ではなく「心守り」ですので、心疲れた現代人を、明るく優しい曲調で静かに癒す。一晚眠れば明日はまた頑張れるよ、という大人を寝かしつける為の歌と言えましょうか。

「崩れゆく砂を素手で堰きとめるような長い1日のあと」

「凍る石の褥（シトネ）にひとり目を覚ませば ほつれかけた上着の裾が風を聴く」

「風よ 心のかかたとに翼をつけて どんな彼方へも ひと晩で行って戻れ」

「遙かな愛しい人々に 悩みのない寝息があればいい」

など、文学的なフレーズを彼女が優しく歌う、隠れた名曲と思っています。当時、会社員だった私は「崩れゆく砂を素手で堰きとめる」という表現にしびれておりました。

そうなんです。『こもりうた』の続きは『こころもりうた』にしようかしら、と一瞬よぎったのですが、同じ過ちはすまい、と即却下。子守歌すらできぬ私に心守歌などできるはずもないことは重々承知しております。今後も一粒のしずくを、薄〜く平た〜くのぼして広げて書こうと思っています。息子の話題も時にはいたしますので、広いお心で読んでください。



みなさま、今年もご壮健で良い一年を過ごされますよう祈念申し上げます。

訶梨帝母

『私説法然伝』(95)

助けてほしい⑩

先月号では法然上人の弟子になる武者・熊谷次郎直実について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【法力房蓮生は法然上人の弟子としてただついて回るだけで収まるはずもなかった。自らの念佛道場を建立することにしたのである。

その念佛道場をどこに建立すべきか悩んだ法力房蓮生は師の法然上人に相談する。そこで法然上人は、かつて法然上人が遊蓮房円照の庵で暮らし、日本において初めて本願念佛の教えを広められた西山栗生の地を勧められたのである。

建久九年(一一九八年)法力房蓮生はさつそくその地に恵心僧都源信作と伝えられる身の丈六尺七寸の阿弥陀如来立像を安置する念佛三昧院を建立したのである。開山上人に法然上人をお招きし、自らは第二世となった。

法力房蓮生は法然上人に勧められて一日六万遍の念佛を申されたと言う。関東へ向かう際は西の方角を向きながら乗馬したとも言われるほど、何もかもが愚直とも言われるほどまっすぐな念佛の人生を過ごした。

建永元年(一一〇六年)彼は予告往生を行う。翌年の二月に往生すると宣言したが、果たせず、九月に再予告を行い、大往生した。日付は吾妻鏡と法然上人伝記とで違いはあるが、とにかく最初から最後までまっすぐであった。

彼の建立した念佛三昧院は今日、西山浄土宗総本山光明寺として、日本における本願念佛の根源地として、今も法然上人の広められた本願念佛を守り続けているのである。熊谷次郎直実こと法力房蓮生が広げた縁は今も生き続けているのである。】

ここまで法然上人と本願念佛を通して縁が繋がった人々の人生を書いてきました。それぞれがそれぞれの「助け」を求めているのだと思います。西方極楽浄土への往生を目指すのが浄土佛教の目的であります。法然上人の教え伝える本願念佛とは、西方

極楽浄土への往生と同時に今生きている時にどう生きるのか、それも往生であるわけです。「助け」とは佛に助けられることであり、その助けられることでどう生きるかが本願念佛の生き方なのです。

以下次号に続く(征阿)



総本山光明寺阿弥陀堂